

研究ノート

## 「生徒の問題」に教師はどう対応すべきか

— 「生活指導論」の授業から —

### How should Teachers Address themselves to “Individual Student Matters” ?

— A Report from Experiences of Instructions on “Guidance” —

青木 陸

Mutsumi AOKI

Key words : 子どもの自治と教師の指導の兼ね合いを学生と共に探究

#### はじめに

「子どもの問題」に大人はどこまで口を出してよいか、出すべきか、いま世の中全体が迷っている。大人・子どもが世代集団として存在するのも定かでなくなってきた。また「よそ様の子にどこまで言えるのか」という感覚もついてまわる。

このことは学校教育にもあてはまる。学校が特別な場所という意識は薄らぎ、学校と家庭の境もあいまいになった。教師による生活指導も「学校生活の枠内」を原則としていたが現実そうはいかない状況が生まれてきた。20世紀末のストーカー事件以来警察の「民事不介入の原則」が問われたように、学校の教師も「これは家庭の問題だから」と安易に言えなくなった。対応を怠れば教師の責任が問われる風潮の時代となったのである。

「子どもの自治」のあり方も不透明となった。まず子どもの集団・世界が存在するかどうか。もし存在するなら姿を変えているわけでどう変えているのか。それに対応すべき大人（教師）のスタンスとはどのようなものなのか。

もとよりこの稿はこの大きな問題に正面から研究的に挑もうとするものではない。私の大東文化大での授業記録をもとにした小論考にすぎない。私は今年度上半期・2単位の「生活指導論」の授業を「子どもの自治と教師の指導の兼ね合い」という問題意識をもって進めた。私としては16年度前期で5回目の講座となる。

この問題の追究には強力な助っ人がいる。それは学生

諸君である。彼らは将来の教師であるとともに現役の青年である。この彼らの立場はこの問題を追究するのに最適である。

授業のやり方であるが、毎回の授業で討論して意見を言ってもらい、最後に授業の感想を書いてもらう。次の授業にそれを環流するというものである。

最後の定期テストでは授業を総括するような文章を書いてもらった。テスト問題はズバリ「生徒の問題」に教師はどう対応すべきか。

#### (1) まず、「生徒の問題」とは

答案提出数は2講座計で72名である。彼らがどんなことを「生徒の問題」と答えたか多い順にあげてみる。なお複数のことを取り上げている学生が多いのでこれはあくまでも言及数であり足して100%にはならない。

まず92%にあたる66名が「いじめ」に言及、次に「グループ・スクールカースト」が40名で56%、「ケンカ・仲間はずし・いじりなどのトラブル」が35名で49%、「発達障害などの困難」が23名で32%、「不登校」が18名で25%などである。

全員が以上のいずれかを取り上げているのは「授業内容を踏まえて」ということを考えてのことであろう。

また「具体事例をとりあげつつ述べよ」という「具体事例」を多い順にあげると、自身の経験例42名（小11, 中22, 高9）、授業で取り上げられた事例25名（実践報告16, 映画9）、家族の話4名、新聞TV4名、教育実習での経験1名である。

上記二つの相関関係は、「いじめ」・「不登校」は自身や周囲の経験例、「スクールカースト」は自身の経験と授業中みた映画、「トラブル」・「困難」は自身や周囲の経験と授業中取り上げた実践報告が多い、という傾向にある。

さて、92%の学生が「いじめ」を取り上げている理由は何か。学生自身の経験例が多いように身近で深刻な問題ということは確かであるが、私の授業構成に起因している面があると思われる。「いじめ」は「この授業が生活指導の集大成」と言って生活指導の最後（「進路指導」が別にある）の授業として行ったのである。授業構成は、

- ①現代の教育問題……不登校とフリースクール
- ②生活指導とは何か……意味と歴史
- ③実践的生活指導入門……初担任の実践例
- ④教師論……教師と生徒の関係はいかに
- ⑤教室内の力学……グループ、「スクールカースト」  
（映画をみてグループへの教師の立ち位置を討論）
- ⑥「クラス」「部活」の歴史……功罪を含めて
- ⑦学校行事のもつ意味……映画をみて討論
- ⑧学校行事でのトラブル発現と教師の指導
- ⑨困難を抱えている子と周囲との関係
- ⑩発達障害と抱えている子への取り組み・サポート
- ⑪いじめについて……とらえ方の変遷と指導

というものである。最初に「生活指導とは生活が指導する」という意味だと学ぶ。前近代から子ども・青年を大人に育てたのは共同体の生活であった。時を経て今、現代社会のなかで学校教師は公教育という立場でその一翼を担っている。日本の教師は長い歴史のなかで、「教科指導」とともに「生活指導」を築いてきた。教師は生徒が学校生活の自治的な諸活動を作り出すことを指導し、彼らの民主的な人格形成に貢献してきた。

そうした歴史と後先に現代生活指導に入っていく。

## (2) “生徒の問題”と「グループ」

現代生活指導で“生徒”をとらえるキーワードは何か。私は「グループ」であると考えている。これは自然発生的な仲良しグループのことである。彼らの生活のなかでグループの存在は大きい。グループはSNSでも結ばれており学校で終わらず家庭までつづく。

生徒たちはグループに自分の存在の安心・あかしを見出そうとしている。しかし一方で、トラブルや仲間外し、いじめなどのリスクを常に背負っている。このことで不登校になることもある。

グループには常に親密志向と同時に排除の力が働いている。いわゆる同調圧力である。グループ間では微妙なポリティクスが展開し、次第に階梯を形成する。いわゆるスクールカーストである。彼らはこうした空間の「空気を読む」ことを常に要求される。そうしたなかで「この世界がすべて」と思わされてしまう。

さて本題である。教師はこの「グループ」をどうみてどう関わるべきなのだろうか。

これについて学生に討論してもらう。初めは「グループの存在の是非」。学生から「自分がクラス担任となったらグループはつくらせない、諸悪の根源となるから」という意見が出る。しかし「グループは自然発生的なものでこれができるのを止めることはできない。逆に仲良しグループがあるから学校へ行く元気ができるのでは」という意見が出てこちらが多数意見となる。どちらも「異なる意見が聞けてよかった」と感想に書いてくれる。

そのうち授業が進んでくると、「異なるグループが行事で接触したり交流したりするなかで世界が広がる、世界がひとつではないことに気づく」「考えの違いを認め合うピアグループとなることでアイデンティティがつけられる」などの意見が出てくる。

次の課題は「グループ」への教師の指導の問題である。授業中にみせた映画2本（「桐島部活やめるってよ」, 「夜のピクニック」）では教師はほとんど出てこず、出てきてもピエロ的な存在である。学生はこうした教師像を否定的に評価し、教師に頼らず生徒のちからで問題を解決していこうとすることに感動する。特に「桐島」ではグループ間のパワーポリティクスが鮮明でそのことには共感する。しかし力の逆転が起こるところでは「（映画は映画で）現実とは違う、そう簡単には変わらない」という冷めた感想もでてくる。さらに「教師が何もわかっていない、教師は（パワーポリティクスを）知るべき」という意見が出てくる。

ここに教師の介入（指導）の是非を問うという課題がいよいよ登場する。まず昨年度初めに学生からとったアンケート結果を紹介したい。

“生徒の問題”を「原則として生徒の手で解決すべき」32%に対し「教師も対応すべき」が68%を占めた。また親・保護者がのりだすことについても「原則としてのりだすべきではない」と答えたものは45%で、「保護者の意志は無視できない」が55%を占めた。ということは「原則として生徒の手で解決すべきだが現実には教師・親の介入を否定できない、時には必要」というのが彼らの現実感覚のようである。

今年度の授業で「自分のクラスで（現代的で）巧妙ないじめが起こったとき、自分が加担者にならないために何ができるか？」と質問した。真っ先に大柄な男子学生が手をあげ「先生を呼びに行く」と答えてくれた。この答えに私は少し不意をつかれた感じがした。私が子どものころは「子どものケンカに親は出ない」が世の中の掟だったからだ。だから時代が変わったとしても「いじめられている子を密かに応援する」とかの答えが出てくるものと思っていた。

同じ学生が「いじめられる側にもなんらかの問題がある」と発言した。少数の同意見もあったが、いじめの側が悪い、そのことに教師はブレてはいけないという意見が多くでる。私も後者を是とする授業をおこなったのでその意見を評価し授業を終えた。

が、終えてからその終わらせ方でよかったのかモヤモヤが残った。いじめについて前年は具体的な実践例で討論させたのだが今回は時間がなかった。ならばせめて「いじめられる側の問題とは何？」と具体的に出させたらよかった、それを通して昔と違う「今の時代の本音」を引き出せたかもしれないと思った。

昔はガキ大将やナナメの関係の年長者がリーダーとなって子どもの問題を解決した。しかし今はそういう環境になく、子ども集団があっても大人に管理されることが多い。その点から「先生に言いにいく」「教師が対応」という選択肢がすぐ浮上してしまうのも理解できる。いじめの加害・被害についても、誰もがどちらにも該当する可能性があることを考えればもう少し彼らの心の襲い分け入るような議論が必要だった。彼らの中の「現代」をつきとめるためにも。

### (3) 子ども・青年の自治と「生徒の問題」

この後の授業展開にいく前に、「子ども・青年の自治」という基本問題にふれておきたい。私が経験した「子どものケンカに親は出ない」にはどういう由来があるのか。

ことは「子ども組」や「若者組」「娘組」といった江戸期の共同体内の集団までさかのぼる。村落内の祭りや警備など一定の役割を与えられ、組は年長者を中心に運営された。後者には男女交際などもあり、青年を一人前の大人にしていくための装置であった。

そうした子ども・青年集団の自治は時代と共に次第に衰退した。高度成長期の終わりころ、いち早くそれに警鐘を鳴らしたのは生活指導運動をリードしていた竹内常一氏であった。そしてそれを引き継いだのが本校教授藤

本卓氏である。1972年の竹内論稿、「もしも子ども集団不在の状況が恒常化するのだとしたら、もう子どもは人間になれないのかもしれない」を、1997年に藤本氏が「竹内氏によって発せられたこの問題指摘を四半世紀の後、いよいよもって本気に受け止めなければならない地点に今日私たちは立っている」と取り上げた。<sup>\*①</sup>

藤本氏の主張は「私たちの課題はこの忘れられた『自治のもうひとつの基礎集団』の記憶を回復しつつ、しかし、異なった社会構造のなかで、その実現可能性をあらためて“発明”しなおす」必要があるというものである。「高校生の一そして中学生・小学生一の自治権の根底に〈世代の自治〉の権利が横たわっている」ということを自覚せよ、という。

その主張からまた四半世紀近くが経つ今、氏の主張を実現することは一見むずかしく見える。

地域において集団としての子どもや若者を見る機会は少なくなり、集団であっても大人に管理されたものになった。親の雇用形態や家庭状況（離婚・介護など）による分断は子ども社会にも持ち込まれている。

イギリスの社会学者A.ギデンズによれば、現代は「後期近代」であってグローバル化と個人化が結合して進行する制度的再帰性の社会であり、解放の可能性と差異・排除・疎外などのリスクが同時に存在する社会である。<sup>\*②</sup> つまり上記した日本の状況は世界状況なのだ。

一方でギデンズは現代社会のもつ「解放の可能性」にも触れ、これは現代社会の「人間関係と呼んでいる領域は伝統的な文脈にはほとんど見出せないような親密性と自己表現のための機会を提供」<sup>\*③</sup>し、「自己アイデンティティ形成」に資するとも言っている。つまり分断と自立はウラオモテで、希望を捨てないでいこうと読める。

藤本氏の主張に戻ろう。実は氏の主張にギデンズと重なるような内容があると私は思っている。次のような氏の文章がある。「今日にあっては、そしてわけても若者に対しては、その“文化”の位相こそが、もっとも実効的な権力作用の磁場となっているわけです。そのなかで〈世代の自治〉を生かす文化的自律の世界の創出をどのように触発し、擁護するかはまさに普遍的な実践課題となりうるはずで、それはおそらく、現場状況の差異にかかわらず、生徒（若者）への言葉かけ一つに始まり、・・・<sup>\*④</sup>というもので“文化的自律”の大切さを強調している。これはギデンズの各自の“ライフスタイル”から“ライフポリティクス”を生み出していこうという姿勢に通じていると私は思う。両氏ともに、資本によって侵襲された生活世界を読み直して、そこから政治

(自治)を編み直していこうと言っているのだ。

そこから思いつくのは近年の学生・若者の政治運動の世界的盛り上がりである。政治的無関心といわれた日本の若者もとうとう動き出した。彼らは自分の言葉で語り、自分たちの日常生活文化のスタイルで運動している。これまでの政治運動とはそこが異なる。「子ども・青年の自治」が新しい形式で登場しつつあると見るのは早計だろうか。「ライフ」や「文化的自律」の位相が濃く、そしてそれは市民的であり、開かれている。それが「新しい自治の形式」であるなら、大人(教師)の介入に“市民的対等的関係”が求められるのではないか。

#### (4) 教師の対応(指導)について

(2)で私は、学生から今の時代の言葉を引き出せなかったことを反省した旨述べた。それで同日午後の別クラスでは時間内でできる発問を追加することにした。それは「いじめの被害者はなぜ自分から言いだせないのか」という問い。このことについて前年までは私の方で見解を提示して討論には付さなかった。しかし昨年の授業で、この提示されたものの順番が納得できないと言いに来た学生がいた。ふとこのことも思い出した。

さて、この問いについての学生の意見は多い順にまず第1が「自尊心・プライド」、次に「大人に言えばもっとひどい仕返しがる」、次に「親に心配をかけたくない」、さらに「言えば友だちを失う」であった。(先の昨年の学生は「仕返し」が第1と主張した)

「自尊心」について討論をもとに試験答案に次のように書いてくれた学生がいる。要約すると「私は小学校の時いじめにあって一度転校した。医師からは軽いADHDと診断された。転校した小学校でもスクールカーストのようなものがありそれが中学校に持ち越された。中学校でいじめがおこり担任はみんなの前で加害者を被害者に謝らせた。しかし被害者の側が不登校になり転校していった。担任の指導について当時は正当なものに思えた。しかし今は考えを変えた。それは大人たちの自尊感情を傷つける指導だった。いじめの被害者にはその自分を認めたくない気持ちがある。加害者は悪いにしろそれなりの言い訳があるだろうから加害者の自尊心も傷つけている。この自尊心について大学に来てから生活指導論だけでなく教育概論や教育心理学でも学ぶことができた。小・中・高と自尊心にも段階があり、教師・大人はそれに応じた指導・介入をすべきである」というものである。「自尊心の発達段階に応じた指導・介入」、内在的な貴重な意見と思った。

別の学生は「いじめにあった時、友人から『かわいそう』と心配されなくなかった。だからいじめられていることじたいを認めなくなかった。人は対等でいたいからだ。しかし自分に嘘をついていた。『自分がいじめられていることを認め、嫌なら嫌といえ』と尾木直樹がTVで言っていて気づかされた。そういう教師の指導は必要と思う」という意見を書いていた。これは勇気をもって生徒を「自分」と向き合わせる教師の指導(言葉かけ)の大切さを言っている。

次にいじめを言いだせない4つ目の理由「言えば友だちを失う」に着目したい。これは「子ども世界の存在」を示している。友だちを失うことは今も自分の居場所を失うことなのだ。「仕返し」も、「親に心配をかけたくない」も結局同じではないか。つまり子どもは子ども同士で生きる世界の存在を根底で知っているのだ。

「自尊心」と「子ども同士」、これは大人(教師)が介入(指導)する時のキーワードである。ある学生は「私がこの授業で一番共感したのは青木先生が(実践のなかで)生徒に言った『マイナスからプラスマイナスゼロになるだけで十分』という言葉だった」と書いている。これは「(教師が舞台設定に手を貸してくれれば)それ以上は私(生徒)たちの問題です」という意味と受け取った。

その他の学生の多くの意見は「教師はふだんから話しやすいクラスづくりに努め、生徒との適度な距離で彼らを見守り、グループが絡んだトラブルが行事などで起きたとき生徒が自主的に解決できるよう、公的で対等な解決の場を設定するのに一役買うのが役目」というものである。また「教師はいろいろな困難や課題を抱えている子に伴走し、話を聞いて一緒に悩むことが大事」という意見も多い。これらは私の授業の影響もあるだろうが、きちんとポイントをつかんでいると思う。

「設定」と「伴走」、さらに「聞く」と「気づき」。

これらはみな生徒を強制するものではない。彼らにとって必要と教師が判断したら届けたいものである。日々の生活、身体・心まで権力作用の磁場となり孤立や不安に脅かされている点では大人も子ども・青年も同じである。教師・大人は市民的対等者として先に挙げたようなことを届ける(指導・介入する)ことで自分たちもケアされ、また生徒・子どもと共に世界を新しく知り、また作り変えていくことができるのではないか。

教師・大人の「言葉かけ」(藤本氏)が、生活からの政治「ライフポリティクス」(ギデンズ)を築いていく。私は学生の意見からそう感じる事ができた。

**\* 註**

- ① 「高校生活指導」135号（1998）藤本卓  
「＜世代の自治＞の再発見へ」
- ② 「モダニティと自己アイデンティティ」（2005）  
Aギデンズ著 秋吉美都他訳